



Title	<書評> Axel Honneth with Judith Butler, Raymond Geuss, & Jonathan Lear edited by Martin Jay, "Reification : A New Look at an Old Idea", OXFORD UNIVERSITY PRESS
Author(s)	岡田, 恭
Citation	年報人間科学. 2010, 31, p. 251-256
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12864
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Axel Honneth
with Judith Butler, Raymond Geuss, & Jonathan Lear
edited by Martin Jay
Reification
: *A New Look at an Old Idea*

OXFORD UNIVERSITY PRESS

岡田 恭

本書の筆者アクセル・ホネットは、一九四九年にドイツのエッセンに生まれ、ボン、ポッフム、ベルリン自由大学で哲学、社会学等を学び、現在フランクフルト大学の社会哲学教授であり、フランクフルト学派の象徴ともいえる「社会研究所」の所長も兼ねる。

ホネットは、フランクフルト学派第三世代の旗手と目されている。第一世代のホルクハイマーとアドルノは、全体主義や大衆社会における「全体的管理」の支配の前に、個々人の解放にたいするポテンシャルティも無力にされてしまうことに対して、ペシミズムに彩られた、自然を支配することではか成立しない文明そのもの、文明を駆動させる人間の一面化した理性のあり方を批判した(徳永 1999)。第二世代を代表するハーバーマスは、第一世代の道具的理性批判を継承しつつ、主体―客体図式を前提とした意識哲学から、主体―主体の枠組みという相互主観性におけるコミュニケーション論に転回する。人間が言葉を用いるのは他者と了解し合おうとする本来的動機があることに注目し、それをコミュニケーションの理性と名付け、個々人間のコミュニケーション的行為によって、文明が「進歩」すればするほど野蛮に陥るという「啓蒙の弁証法」を乗り越えようとした。

一九三〇年代のホルクハイマーとその周辺は、ドイツ観念論、マルクスの経済学批判、ウェーバーの社会学を基礎に、フロイトの精神分析を土台にして心理学も摂取した学際的 sociology 志向していた。彼らは殆どがユダヤ系ドイツ人であり、ナチスによる弾圧の前に多くはアメリカへの亡命を余儀なくされる。ファシズムに勝利し、スターリニズムを批判したアメリカでの経験を有したにもかかわらず、第一世代を代表する

ホルクハイマーとアドルノにおいて、そこは真に解放された社会、あるいは「理性的な社会」ではなく、有力な政治家や資本家そして「文化産業」としてのマスメディアによって個人を大衆へと矮小化しようとする管理社会であった。そこで力をもった、人間の意識をも数量化しようとする実証主義的な社会科学も彼らは受けつけなかった。

第二世代のハーバーマスは、自らの「コミュニケイション的行為の理論」の構築にあたって、オースティンやサル、後期ウイトゲンシュタイン等の言語哲学を始め、分析哲学やプラグマティズムを積極的に取り入れた。彼は又、第一世代以上に、アウシュヴィッツをすぎ去った過去にして忘れようとする歴史学者達の言説を批判した「歴史家論争」や、現在の日本でも派遣切りやワーキングプア等として「持つ者」と「持たざる者」に二極化する格差社会の政策・法レベルでの元凶をもたらした思想としてのネオリベリズムを「新保守主義」として既に一九八〇年代に批判してきた。現在では、九・一一テロとイラク戦争に対して、イスラム原理主義や、それを乗り越えようとする国際法の新たなあり方に向けて、カント的プロジェクトを再構成しつつ、宗教と世界平和を理論的に模索している (Habermas 2004)。ハーバーマスは、第一世代とは違って社会理論に英米系の知を積極的に摂取し、彼等以上にジャーナリズムで「政治論」を展開してきたが、彼のいう主体はあくまで社会理論上のものであり、具体的な社会問題当事者の目線で、現実の行動をリードするものではない点で、第一世代の延長線上にある「社会哲学」であった。本書の筆者ホネットは、ハーバーマスを継承して、間主観性のレベルで、ヘーゲルとミードに基づきながら、「コミュニケイション的行為

の理論」を補充する「承認の理論」を構築した。ホネットによれば、人が言語によって了解するには、それに先立って家族で無条件に愛情を受け、市民社会で法律によって平等な権利を保証され、最後に主に労働を通してその人の能力ややり遂げた仕事によって同僚から「社会的に価値評価される」という三段階の「承認」が必要である (Honeth 1992、訳 p.74)。フランクフルト学派第三世代として、彼は社会理論を新たに提示しながらも、自らの「社会哲学」を、社会学、心理学の研究として実証しようとする動きも見せている。更にホネットは、「承認」を剥奪されるか、獲得できない状態を「社会的不正」として重要視し、学歴の有無による排除や個人に対する抑圧、ジェンダーの上での差別等、具体的な現実のレベルの問題に取り組む姿勢を見せ、その為に様々な同世代の研究に言及し、「批判理論」を「象牙の塔」から引きずり出し、現代社会学の一つの、しかし有力な潮流に位置づけ直す (Honeth 2000、訳 pp.120-141)。

1. ホネットのルカーチ論

ルカーチが一九二三年に公刊した論文集『歴史と階級意識』(訳、平井俊彦訳、未来社、一九六二年)は、マルクスの哲学的側面に光を当てただけではなく、マルクスの「商品の物神的性格」からインパクトを受けたルカーチの「物象化」概念の定式化において、「西欧マルクス主義」に大きな衝撃を与えた。ルカーチの「物象化」は、資本家による労働者の「搾取」と同じかある意味でそれ以上に、先進工業国に生きる人々の意識を侵す「病理」として、そこからホルクハイマーの「道具的理性批判」も生まれ、それを乗り越えようとするハーバーマスの「コミュニケ

イシヨンの理性」も生まれてきた、いわばフランクフルト学派の伝統的な理論課題である。

ホネットによれば、ルカーチのいう「物象化」とは、商品交換の下で、諸主体が、(a)自然を含め他者を客体として、潜在的に利益を生み出す単に「モノ」として知覚し、(b)お互いを単に利益を生み出す取引の「対象」としてみなし、(c)自らの努力自体をも利潤を計算する上での補完的な「資源」としかみなさなくなることをいう(22)。そしてルカーチによれば、「資本主義において、物象化は人間の『第二の自然』を構成するようになる」(23)。更に、諸主体は、商品交換が絶えず拡張していく領域において、他者が自分にとって生み出すかもしれない利益を計算し合うことが求められる、そのために「純粹に合理的で感情を欠いた姿勢」(25)を要求される結果、「社会生活における積極的な参加者としてよりもむしろ、超然とした観察者として振舞うよう強いられる」(同)。ルカーチは結果として、「物象化」を、「単なる瞑想と観察の習慣」(同)として理解し、そこにおいて諸主体は、自然環境、社会環境、そして自分自身を「外から」感情のないやり方で、モノとして理解するのである。ホネットによれば、ルカーチにとって、物象化とは、単なる認識の仕方 of 誤りでも、道徳的な罪でもなく、「構造的に誤っている実践」(26)であった。とはいえ、ルカーチも物象化を批判する規範的原理として、人間のあるべき実践のようなものを考えてはいた。そこにおいて諸主体は、世界を直接に「彼(女)のパーソナリティの一部」として、又、「協同的な」ものとして経験し、「客体は主体によって質的に独自のもの、本質的及び内容において特別なもの」(27)として経験され得る。

ルカーチは、物象化批判の規範的基準としての真正なプラクシスを「共感的かつ実存的な関わり」(29)と考える。ホネットが、若きヘーゲルの「イェーナ哲学」に着想を得て、ミードを援用することで経験的に実証可能なものとして構築した「承認の理論」で、ハーバーマスの「コミュニケーション的行為の理論」を補充しようとしたことは先に述べた。ホネットのヘーゲルに基づいたこの試みは、ハーバーマスと同じく間主観的な行為論の視座からあるべき社会の生成を構想したものだ。一方でフランクフルト学派の第一世代と第二世代が、物象化批判として自らの社会哲学を練り上げてきたように、本書でホネットも、ルカーチのこの「共感的関わり」と自らの「承認」概念の親和性を「発見」し、ルカーチに引きつけながら承認の理論によって物象化のメカニズムを説明し批判的に克服しようとする。

ホネットは「承認」概念によって物象化を批判するために、社会的文化的土壌は全く異質で疎遠な、しかし時間的にはルカーチの『歴史と階級意識』の直後に発表された作品と論文の著者である、ハイデガーの「氣遣い」とデュイイの「実践的参加」の概念が、ルカーチの批判と驚くほど近く、物象化の問題圏を解く鍵となっていることを「発見」する。ハイデガーは、物象化の原因を資本主義的な商品交換とするルカーチの社会学的視角とは無縁であったが、その著『存在と時間』で主体が他者を客体として捉える哲学の批判の意味で「氣遣い」の概念を提出した。ホネットによれば、ハイデガーの「氣遣い」も、ルカーチの「共感的関わり」と同じく、主体が「他者の身になって考える行為を指示する」が、そのことで「他者の行為の理由を理解する」ことに汲み尽くされない、

他者に対する「情感に満ちた」、更に「肯定的な性質」を付加した概念である (p.5)。これは、他者との関係性で互酬性を求めない点で「コミュニケーション的」な姿勢と区別され、明確な動機がないにもかかわらず他者に対して「積極的な肯定と感情的包み込み」の姿勢をとる点で「非合理的」ではあるが、ルカーチとハイデガーによれば「物象化」や「誤った存在論の優越」の下で人間の意識の背後に潜在化され、その姿勢は社会で周辺化されたものにとどまるけれども、決して消滅することはないのである。

デューイの「実践的な参加」の概念によれば、人間は生まれて本来、世界があるがままに、世界が普遍的に有している固有の質を経験しながら生きていく。その世界の「質」を直接に経験する中でこそ、例えば児童の、学校での教科学習も可能となる。その中で児童は、自然や他者を「背景」化しながら、選択的・反省的に学習内容に注意を向け、いわゆる集中力を発達させることができる。しかし、デューイによれば、あくまで世界への直接的・前反省的「参加」が前提であり、それと切断されては注意力（集中力）も成立し得ない。

ルカーチの、資本主義的な商品交換に支配された社会が、人間の、「外部からの」単なる観察者にすぎない「物象化」したありようをもたらしという狭義の社会学的アプローチを認めつつも、ホネットはそれを絶対的な唯一の原因とはしない。それよりもむしろ、デューイの「参加」概念によって主体自身の問題としての「物象化」を考慮することで、ホネットが本書で主軸とする「承認の忘却としての物象化」が見えてくる。同時に、ハイデガーの「気遣い」の概念によって、他者を無条件的に愛情

深く肯定的に「価値評価」するという、ハーバーマスの「コミュニケーション的行為」を補いつつもそれとは区別されるホネットの、他者の「承認」が裏付けられる。

フロイトを分析哲学で（例えばデイヴィッドソンを用いて）解釈しようとするような新しい研究潮流に棹さして、ホネットもハイデガー、デューイに代えて、ではなく彼等に対して新しい解釈をなそうとしている。ハーバーマスの著作の翻訳を数多く手掛け、現在のハーバーマスと批判理論研究の第一人者である木前利秋氏によれば、ハイデガーとデューイが並んで論じられるのが、ホネットがローティ以後の理論家といわれる所以である。

2. 承認の忘却としての物象化

「病理」としての物象化が、ルカーチのいうように資本主義的な商品交換に支配された社会が原因で生じるといふ社会学的アプローチにせよ、デューイのいうように、個人が本来有していた世界との直接的「参加」に基づいて発達する学習能力である注意力（集中力）としての認識力が「参加」から切り離されて生じるという心理学的アプローチにせよ、「物象化された」人間のありようとは、「超然とした観察者」、本来の目的から切断されて単なる知能と化した認識力、として類似したものである。システム論ではなく行為論の立場から承認理論を展開するホネットは、後者に軸足を据えて分析を進める。

本書においてもホネットは、ルカーチ、ハイデガー、デューイの議論がいずれも概念レベルのものであったため、発達心理学や社会化研究といった経験レベルの研究成果によって、自らの理論の実証的裏付けをと

る。それらによれば、幼児は、他者の身になって考えることで初めて、その他者のものの見方で世界を見ることを通して、客観的に世界を「認識」する力を身につける(52)。そして幼児は、相手の身になって考えることができるためには、その他者に愛情を抱き情緒的に一体化できないければならない(同)。人間がヒト化する過程を研究し、「心理学のモーツァルト」と謳われる、早逝した旧ソ連の心理学者であるヴィゴツキーの立場を採用する認識・進化人類学者としてのマイケル・トマセロは、幼児が言葉を使って思考するには、それに先立って他者との情緒的同一化が不可欠であると述べる(53)。認識的・言語的能力が発達するためには、幼児は、相手の身になって考えることが必要であり、そのためには親からの無条件の愛情が必要である、ともいえる。この両親と子供が愛し合う関係こそ、ここでホネットが「承認」と名指すものである。

注意すべきこととして、ホネットは、スタンリー・カーヴェルの議論を取り上げる。カーヴェルによれば、子供が両親との承認関係に根付いた認識的・言語的能力を発達させて、学校で客観的知識を獲得していくとしても、その、モノに対してとるような認識的態度は、他の人間に向けるものではない。他者は自分と同じ人間であって、客観的なモノのような認識の対象ではない。ゆえに他者の精神状態を「見抜こう」とするのではなく、相手の気持ちによって自分も影響を受け、相手の苦しみが「わかる」とは「頭ではなく気持ちが伝わる」実存的関わりの態度で臨むべきなのだ(54)。

承認と認識は対立するものではなく、認知・認識は承認を前提とするのである。学問といえただ知識をため込み洗練させるだけが認識を高

めることだと自己目的化しがちだが、もともと認識を養い培うということは、身近な者同士が相互の感情を分かち合い互いの立場を認め合う広い意味での「承認」の営みを土壌にしているのである。しかし、カーヴェルによれば、生徒や学生の認識への努力が身近な者同士との承認関係を忘却させて物象化する危険は主体の内に潜むだけではない。「認識主義のモデルを取り入れるようにという毎日の日常の中での誘惑に暗に含まれている危険」(55)が社会に遍在する以上、意識して「相互の共感の事実を思い出さ」(同)なければならぬ。この点において、ルカーチの物象化への社会学的アプローチも全面的にはないが正しいのである。

3. ジュディス・バトラーによる評価

本書は、二〇〇五年にカリフォルニア大学バークレー校で行われたホネットによるターナー講義に基づいており、彼の講義に対して三人の論者によってコメントが加えられ、本書に収録されている。ここでは三人の内の一人であるジュディス・バトラーによる評価に一言だけ触れておく。

バトラーはホネットの講義に基本的に賛同しつつも、彼の承認理論では人間性のもう一つの事実である攻撃性が説明できない、とする。ホネットは、ナチスの強制収容所での所業を、物象化された外からの観察者による行為であるとはいえない。超然としながらサディスティックな興奮に駆られて行動する人間はいくらでも存在するからである。

引用・参考文献

徳永 恂 『現代批判の哲学』 東京大学出版会 一九七九年

Habermas, Jürgen : *Der gespaltene Westen*, Frankfurt am Main, Suhrkamp Verlag, 2004

「『引き裂かれた西洋』 大貫敦子・木前利秋・鈴木直・三島憲一訳 法政
大学出版局 二〇〇九年」

Honneth, Axel : *Kampf um Anerkennung. Zur moralischen Grammatik sozialer Konflikte*,

Frankfurt am Main, Suhrkamp Verlag, 1992 「『承認をめぐる闘争』 山本啓・

直江清隆訳 法政大学出版局 二〇〇三年」

Honneth, Axel : *Das Andere der Gerechtigkeit. Aufsätze zur praktischen Philosophie*,

Frankfurt am Main, Suhrkamp Verlag, 2000 「『正義の他者』 加藤泰史・日暮

雅夫 他訳 法政大学出版局 二〇〇五年」